

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990200040		
法人名	特定非営利活動法人 醍醐会		
事業所名	醍醐の森川崎グループホーム		
所在地	栃木県足利市川崎町2316番地		
自己評価作成日	平成30年1月5日	評価結果市町村受理日	平成30年3月2日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6
訪問調査日	平成30年1月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは、認知症高齢者に対して家族、地域への理解を深める為に積極的に夏祭り、家族会、クリスマス会等のイベントを企画し、実行している。特に夏祭りは、隣の施設と合同で開催され、職員、家族会、ボランティアから構成される実行委員会を組織し、地域住民にも参加を促し、参加数400人を超える当法人、地域の最大のイベントの規模となっている。そうした地域との連携は、常日頃からの入居者一人一人が地域の一員として生活させることに力を注いでおります。広大な敷地の花壇には季節を感じられる花・樹木が植えられてあり、又農園には、季節の野菜が栽培され、それを入居者が世話をすることによって社会的役割を与えて、自信を持って「ここが『我が家』です。」と言えるように支援している。当ホームでは、併設するインフォーマルな宿泊事業も利用し、医療施設と緊密な連携して、ターミナルケアを行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、創設者が旅館業を営んでいたこともあり、設立当初より「おもてなしの心」を大切にしている。病気であっても障害があっても沢山の楽しみのある「その人らしい暮らし」を、家で暮らしていた環境そのままに「我が家」であるように、四季を感じ美味しいものを食し「温かい家庭的な雰囲気」の中で利用者も職員も気持ちよく過ごせるように、といった創設者の思いが職員にもしっかりと受け継がれて、日々の支援に反映されている。植栽や畑の管理専門の職員がおり、新鮮な旬野菜を使った美味しい食事の提供や、四季を感じられる環境作りに取り組んでいる。犬と猫を飼っており、利用者や来訪者のみならず近隣住民の癒しの存在となって、地域交流にも一役かっている。隣接の学童保育の子供たちが日頃から遊びに来るほか、町内行事に積極的に参加したり、地域の方を事業所催事に招待するなど、相互交流が盛んである。地域との繋がりを大切に、安心安全で楽しい暮らしの支援に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、地域に密着し、そして地域に貢献できる施設の運営を目指して、その事業理念を共有している。	管理者と職員が共に考え作り上げた理念を基に、家庭的雰囲気を中心とし、地域との繋がりを大切に、安心安全で楽しい暮らしに努めている。日々の支援で迷いや疑問が生じた際は、常に理念に立ち返り話し合い、理念を実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会費を納入し、回覧板を受け取り、届ける等、職員と入居者が一緒に行き、積極的に町内会のイベントを通して地域の一員としての自覚を持たせるよう支援している。	地域や施設の行事の他、学童保育の子供が遊びに来たり、近隣住民から野菜のお裾分けがあったりと、日頃から交流の機会が多く顔見知りの関係ができています。実習生やボランティアの受け入れ、講演協力なども行い、地域との繋がりを深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当ホームで開催される夏祭り、クリスマス会等のイベントへの参観等によって認知症への理解を促進するばかりでなく、積極的に町内会活動に参加する度に認知症の理解と施設の関わり方の説明の機会を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に、当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時に、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に意見を吸い上げるようにしている。	市や地域包括支援センター職員・地域住民・家族会代表・利用者などが参加し、年6回開催している。事業所行事と同日開催するなど、事業所の取り組みや利用者の様子がみえるよう努めており、参加者からの助言や提案を運営や支援の向上に活かしている。	地域の最新情報や防犯対策などの情報提供の他、有事の際にスムーズな協力を得られるよう、駐在所など警察関係者の会議参加実現に向けた取り組みに期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	当ホームの運営推進会議の委員である職員、行政関係者と共に「協働」を礎に信頼関係を築くことが出来るようになった。	各種手続きにおける役場訪問時や、運営推進会議での市職員来訪時等、必要に応じ電話連絡などを通しての相談の他、顔を合わせる機会においては、世間話の中からも情報交換に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、身体拘束の定義や事例を挙げて話し合いの機会を設けてメディスンロック防止等についても取り組んでいる。研修報告も行い、スキルアップに繋がっている。	会議時やマニュアルでの確認、内外研修を通して学びの機会を設けており、職員は身体拘束にあたる行為についてよく理解している。利用者個々の性格や生活習慣、認知症の特性を理解した上で、安全に配慮しつつ言葉かけの工夫などに努め、拘束のないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、「栃木県高齢者虐待対策マニュアル」を中心に勉強会を開催し、その予防に努め、事業所以外でも虐待があった場合の通報義務等についても討議、検討を重ねている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、地域福祉権利擁護事業を利用していた利用者がいた為、十分に理解しているが、毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、その必要性がある対象者の有無を検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	当ホームへの入居契約締結時可能な限り、管理者、計画担当責任者又は、それに準ずる職員が担当し、詳細に至るまで説明し、理解、納得を図り改訂がある場合には当ホームで組織されている家族会の総会等で説明し、新たな契約締結を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に、当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時に、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に意見を吸い上げるようにしている。	行事や面会時など日頃から関係作りに努め、意見や要望を話しやすい雰囲気作りに留意している。家族会の開催により、屈託ない意見交換ができる機会を設けており、出された意見は運営に反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、運営や各々の入居者の情報の共有、それに対する介護、それに対応する為の用具、器具等の購入、使用方法までの討議をしている。	連絡ノートを用いて相談や情報を共有し、日々の支援に反映させている。定例会議前に各担当部で会議を行い担当部毎の意見をまとめ、挙げられた意見や提案については法人全体で話し合い、運営に反映できるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は法人の理事会等に於いて各事業給与水準等の意見を吸い上げており、定例会議に於いても職員が要望する介護し易くするための福祉用具等の充実を図り、管理者と職員の距離を近くして職場環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、個々の職員の介護能力を把握しており、毎月、すべての職員が参加して行われている定例会議に於いて、勉強会を開催し、さらに法人内外の研修に積極的に参加され、それをまた、定例会議の場でフィードバックさせている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当h-無は、栃木県グループホーム協会、栃木県小規模ネットワーク、あしかが介護支援専門員協会等に所属し、職員をそこで開催される研修会等に積極的に参加させ、ほかの事業所との交流を図り、その良い点を取り入れる。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設されている認知症専用デイサービスを利用されていた利用者が入居者となる為、殆どの利用者本人との安心確保、信頼関係は既に構築されている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	現在の生活状況や不安なことを充分時間をかけて聞き取り、要望に添えるようにしている。安心して利用開始に繋げられるよう努力を惜まず信頼関係に努めている。そして希望にそった支援に繋げ、安心して暮らせるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームでは、グループ関連事業所に居宅支援事業所を併設していない。従って、特別養護老人ホーム等に併設されている居宅支援事業所で横行する「抱え込み」を行っていない。市民に支援される施設を目指し、介護保険制度の説明を懇切丁寧に説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と楽しく暮らすことを基本に考え調理関係、環境整備などを一緒に行っている。自室掃除はできる範囲でお願いし、皆さんと気持ちよく過ごされようとしている。時には昔の料理を教えて頂き参考にすることもあります。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会を組織し、家族への各種イベントの積極的な参加を促し、職員と共に入居者を支えていくことを認識して頂けるようにしています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者本人が「ここが私の住まいです。」と認識して頂けるようにし、家族を含め、家族の理解を得て、親戚や知り合い等の面会を積極的に受け入れている。また、買い物等で出かける際に、各々の入居者のなじみの場所を訪れるようにしています。	馴染みの店への外食や買い物、実家近くをドライブするなど馴染みの場へ赴く機会を設けている。親戚や友人の来所時には、ゆっくりと歓談できる場を提供している。名前や顔を忘れていた場合も多いが、何度も来てもらうことで関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	当ホーム内で入居者が孤立しないように洗濯たみは毎夕の入居者同士が協力して行う作業とし、散歩等で他の入居者の車椅子を押してもらったり、相互の関係を構築できるように支援している。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	重篤になり、入院した場合、退去を余儀なくなった入居者は、退院後、同グループ事業所の小規模多機能に繋げるか、併設する宿泊事業で支援するようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に声掛けを行い「どうしたいのか?」「どう暮らしたいのか?」等を入居者本人に確認して、それを家族に伝え、要望を叶えるようにしているが、困難な場合には代替え等を考えて支援している。	声掛けにより意向の把握に努めている。言葉での訴えがない場合でも、本人の特技や趣味などの経験を活かした活動を取り入れたり、日々の支援の中で嗜好を把握したりしながら、思いを引き出せるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの時期には、基本に立ち返り、再確認している。「現在の暮らしに適しているのか?」等をサービス利用計画等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各々の入居者のその日のバイタルチェックや睡眠状況で心身状態を把握し、一日の過ごし方を決定するが、入居者本人の要望も大切にしよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的カンファレンスを行い、計画に沿った支援が出来るかを振り返り、計画変更時には数回のモニタリングを調理、デイ看護師等を含めた職員全員で行い、計画については、本人とその家族の意向を最優先し、担当の職員を中心に職員全員によって支援内容を決定し、作成されている。また、定例会議に於いても討議の機会を得ている。	半年に一度を基本に、機能低下や変化があれば必要に応じその都度見直しを行っている。カンファレンスでは日頃の様子や家族・関係機関の意見を踏まえ、職員全員で検討し、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、支援経過記録を残し、アセスメントの参考にしている。また、変化に対しては細かく記録し、職員全員が把握できるようにしている。そして、次の計画に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常に入居者本人に適したサービスを提供できるよう、入居前のケアマネージャーに相談や家族に注意事項を伺い、場合によっては、当ホームの認知症専用デイサービスと宿泊事業で柔軟に対応すると共に隣接する同グループ事業所の運営する看護小規模多機能施設と連携して支援できるようにしている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物、外食等で入居者と職員が一緒に出掛ける際は、出先に連絡を入れたり、事前に訪問し、認知症を説明して理解を求め、協働して入居者が安心して利用できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人の委託医に隔週で訪問してもらっている。その為、各々の入居者の状況を的確に伝え、状況が変化し検討の時期になった場合は、家族等を交えて納得がいく診察ができるよう支援している。些細な変化でも委託医に連絡し、他の診察時にも経過記録を作成し、家族と情報共有ができています。	月2回内科医の往診がある。必要に応じ訪問歯科も利用している。眼科や外科は家族対応で受診をお願いしている。受診の際は日頃の様子や変化を家族に伝え、情報共有し連携を取っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設されている認知症専用デイサービス看護師と情報を共有し、些細な変化も見落とさないように適切な受診に繋がられるようにしている。更に、当法人の委託医の看護師にも同様に情報共有し、支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力支援病院と協力契約を締結し、入院元を見舞いや訪問を行った際には、先方の医療機関関係者と情報交換を密にし、できるだけ早期に「住み慣れた家」に戻れるように努めている。退院後の通院には、その入居者の状況を書面を添えて受信できるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	大きな変化があり、改善の見込みがないと委託医が診断した場合、家族に直接、説明してもらい、当ホームの可能な介護範囲を納得いくまで説明し、その方針を決定し、それを入居者本人、その家族、委託医、職員と共有して支援している。	利用開始時に意向を確認している。レベル低下時には本人の状態や事業所で対応可能な支援について説明し、家族の意向を再確認している。同法人の小規模多機能型事業所との連携を取りながら、看取りにも対応し、本人の思いや家族の意向に添えるよう支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、当ホームに併設される認知症専用デイサービスの看護職員の応援を受けて、応急処置や急変時の指導や訓練を適時行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練、扶南訓練は年二回行っている。夜間、職員が一人になった場合を想定して、近隣住民に各々の入居者を担当してもらい訓練を行っている。再三、オール電化の施設にすよう行政から勧められてきたが、太陽光発電と蓄電自動車を導入し、石油、ガス等にリスク分散した為、先の震災時に耐えられたと思う。	年2回の消防訓練と、避難訓練等を実施し、近隣住民の協力を得て各部屋毎の利用者を担当してもらい、避難誘導や見守りなどをお願いしている。食糧備蓄の他、太陽光発電と蓄電自動車の導入により、災害時の自給に備えている。同法人施設が市内に分立しており、互いに避難場所の提供ができるよう連携している。	

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に開催し、画一的な介護にせず、常に個別ケアを意識の中に置き、一人ひとりの人格を尊重しながら、且つ、プライバシーを守りながら、優しい対応を心がけている。	個々の人格やプライドに配慮し、本人本位の支援に取り組んでいる。入浴や排泄介助時の声かけなど、羞恥心に配慮した支援に努めている。個人情報保護の観点からボランティアや実習生が入る際は同意書をとる、個人書類の取扱いには十分気をつけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、常日頃から優しい対応で、信頼関係を築きながら、各々の入居者本人の思いを知り、自由に自己表現できるようにしている、そうすることによって自己決定出来るように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員本位の介護ではなく、入居者本人の心地良い場所の提供やその雰囲気優先し、「今日は何がしたいのか?」「どう過ごしたいのか?」を伺い、その希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段から入居者本人の要望に沿った身なりを整えるようにし、特に外出する際には、女性は化粧をする、特にお気に入りの服に着替える、男性も同様に念入りに髭を剃る等、身なりを整えるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	当法人の畑で旬の野菜を収穫し、彩りや盛り付けに工夫し、健康面を考えながら、できるだけ薄味で食事の提供を行っている。配膳も同様に、片付け等に関しては、所定の場所まで持ち運びできる入居者にはお願いしている。	畑で収穫した新鮮な旬の野菜やお手製ヨーグルトなどを取り入れ、毎食手作りしている。配膳や大根下ろし、珈琲を淹れるなど、利用者の残存機能を活かした作業をお願いしている。うどん打ちやおやつ作りなど、毎月皆で楽しく手作りする機会を設けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は、管理栄養士が行っていて、食材、一日の栄養バランスが把握できるようになっている。特にカルシウム、鉄分の補給ができるように心がけている。水分摂取は、経口補水液を作り、摂取しやすいように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前に誤嚥防止の口腔体操を行っている。毎食後、口腔ケアを行い、毎晩ポリドント消毒を行っている。歯磨きは、本人に任せているが、認知症振興により困難な場合には、職員が最終的に確認を行っている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけ日中は、トイレ使用を支援し、オムツやパッドの使用を減らすようにしている。認知症の進行により排泄機能が低下している入居者に関して排泄パターンを知り、誘導し、排泄の失敗を防止に努めている。	記録を付け個々の排泄パターンを把握している。拒否のある方も気分を害さないようタイミングや言葉かけを工夫したケアに努めトイレへ誘導し、日中はトイレでの自立した排泄支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	元氣アップ体操や屋外の広大な敷地を散歩することによる運動を行い、水分摂取量の確認や繊維質を多く含む食品やヨーグルトを摂取するように心がけ、職員がそうした取り組みができるように摂取表を作成している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望があれば、毎日、入浴可能な体制になっており、入浴時間は、昼食後から夕方にかけて時間帯で支援しているが、ADLが低下した場合、併設する認知症専用デイサービスのリフト浴を利用して入浴支援を行っている。	一日おきを基本に午後の時間帯に支援している。毎日入りたい方や気分の乗ったときなど、その方のタイミングで入浴できるよう臨機応変に対応している。薬用ミネラル温泉を使用し、ゆず湯など季節を感じられるものを取り入れている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活パターン表を作成し、睡眠状況の確認し、日中は、心地良い疲労感が得られるような活動を提供することによって安眠に繋げている。但し、普段より疲労感が見られる場合は、休息を促すようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員は、常に各々の入居者の疾病とその症状を把握し、処方箋を確認出来るようにしている。入居者の服用の副作用や効果を記録し、委託医の診察の際は、その症状や変化を伝え、経過観察を記録して支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	9人のグループを家族として捉え、様々な役割を担うことで張りのある暮らしが出来るように支援している自由時間には、楽しむ事で過ごせるように配慮し、ドライブ等で気分転換させるように退屈しない過ごし方を心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	当法人の組織する家族会に協力してもらい、年二回近隣市町村へ小旅行に出掛けている他、ショッピングモール等に出掛けている。又、入居者が希望する場所にも出掛けており、日常的に外食にも出掛けている。	外食や買い物、隣市のショッピングモールやフーパークへのドライブなど日常的に出かけている。家族を招待して事業所全員での年2回の小旅行を楽しんでいる。日頃から外出の機会を多く設けることで利用者本人も外出に慣れており、家族との外出や外泊時にもスムーズに出かけることができている。	

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設の買い物にでかけた際には、購入した金額の支払いを各々の入居者にお願いしている。又はその能力がある場合は、入居者本人の持っている財布より商品を購入が出来るように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話も利用できるようにしてあり、手紙等も同様に葉書、便せんもいつでも利用できるようにしてある。希望があれば、いつでも家族や友人等と連絡可能な状態にしてある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の温度、湿度は、常に適温適湿に保つように配慮し、トイレや調理室等が分かり易いように表示してある。季節感を感じられるような楽しい掲示物を作成している。また、庭に咲いている花を屋内に飾り、その空間作りをしている。	玄関はバリアフリーで車椅子でもスムーズに移動できる。四季を感じられる中庭を眺めながらくつろぐことができるよう、回廊にテーブル席を配している。リビングにはピアノや季節感のある装飾があり、明るく清潔である。トイレや浴室、キッチンなどの表示は、わかりやすさに配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子等をホールだけでなく廊下や玄関先にも配置し、どの場所でも自分の時間を過ごせるようにしたり、気の合った入居者同士で過ごせるようにしたり、また、自分の部屋に招き入れられ、ゆったり過ごせるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内の配置は、入居者と家族が決定し、自宅にいるような雰囲気でも過ごせるようになっている。入居前まで使用していた家具を持ち込み、自分の生活スタイルを維持し、心地良い環境を整えている。	部屋の入り口に板の間があり奥が畳となっている。押入・エアコン・ベッド・カーテン・温湿度計などが備え付けられている。馴染みの物の持ち込みは自由であり、ベッドや箆笥など家具の配置も各々が過ごしやすい環境になるよう整えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用の場所には、絵や大きな文字で入居者の目的が分かるようになっている。入居者が入居以前の自宅のトイレの位置によって入居する部屋を決めることもあり、安全かつ、出来るだけ自立した生活が送れるように努めている。		